

九年九カ月

—— いろいろあつた編集者生活 ——

柴崎昭則

こんにちは。春学期の「デスクトップ・パブリッシング演習」と秋学期の「編集技術論」を担当している柴崎です。

今日の話は、「編集技術論」の授業中に行つたアンケートにもとづいて、大きく三つの柱を立ててみました。一つは、どんな就職活動をしたのかということ。もう一つは、書籍の編集の仕事とはどういふものなのか、その実際の話ですね。そしてもう一つは編集者に向いている人とはいったいどんな人なのだろう、ということです。

いろいろな裏話を聞きたい、という意見もありましたが、私自身が知っていることはたかが知れています。もっと知りたいという人には『噂の真相』という月刊誌を紹介しておきましょう。とてもいい雑誌なので、ぜひ読んでみてください。

1 「たまたま」なつてしまつた編集者

手元の資料に「たまたま」なつてしまつた」などと書いてあつ

て、なんてことを言うんだ、と思つている人もいるでしょうが、これは本当のことです。学生時代に出版とか編集の仕事をしようと考えていたわけではありませんでした。当時私は大学院の博士課程前期課程（マスターコース）に行つていたので、企業の求める学歴とマッチしなかつたんです。普通の会社は、文系の職種には四年制大卒とか短大卒を求めます。それより上の文系大学院、しかも日本近現代史専攻の人間なんか必要ない、と基本的には判断するわけです。こうした事情があつたので、学歴を表向き気にしないマスコミ関連企業を受けて、たまたま書籍編集の仕事に就いた、というのが実情でした。

■ 「やりたい仕事」よりも「できそうな仕事」

いろいろなマスコミ関連企業の中で、私は「やりたい仕事」よりも「できそうな仕事」を選びました。やりたい仕事が特になかつたという自身の怠惰な性格の問題もあるんですが、今から振り返る

と、できそうな仕事を選んだ方が結果的には長続きするんだろうな、とは思っています。

学生時代には、自分が就こうとしている仕事の中身、実態というのはよくわからないですよ。その場で働いているわけじゃないですから。会社説明会に行ったり、実際に働いている人の話を聞いていたりして情報を集めても、どうしても埋めきれないギャップは残ってしまう。となると、いざその仕事に就いてみて「こんなはずじゃなかった」と思うよりも、自分にできそうかどうか、これぐらいだったらできるかなというところで仕事選びをしていくと、大当たりはないかもしれないけれども、大きくはずすこともないでしょう。

たとえ人と接するのが好きという人は、営業関係の仕事はだいたい大丈夫ですよ。でも、人と接するのはあまり好きじゃないという人は、営業関係の仕事に就くと毎日がストレスの連続になってしまう。こんなふうに、自分の性格とも考え合わせて、できそうな仕事を選ばうわけです。

結果的には、私は一つの仕事に一〇年と持たなかったのですが、できそうな仕事に加えて、「長い間働き続けても耐えられそうな仕事」という選び方もしておけばよかったですかなあ、とは思っています。

耐えられる、というのもちょっとネガティブな言い方ですね。でも、趣味が仕事になるという幸せな人生を送る人は少ないわけで、やはり人間はどこかで妥協しなきゃいけません。そんなときに、耐えられるかどうかというのは結構大きなポイントになります。会社に行きたくないけど、でも何とか行ってみるかと思えるような仕事、ときには楽しいこともある仕事、そういう仕事を選んでおけばよかったんだろうな、と今にして思っています。

実際に応募したのは①出版社や編集プログラムクション、②新聞・通信社、③進学テスト会社、④調査会社や研究機関——などで、二〇社くらいに応募書類を提出しました。当時は「就職協定」というものがあって、毎年一〇月になると会社説明会がはじまって、一月に採用試験が行われる、という建て前でした。もともと建て前はなしくずしになっていて、ほとんどの会社が夏ごろには内定を出します。私は、建て前があるのにその通りにやらない会社は嫌いだつたので、いわゆる「青田買い」をしない会社を選びました。あとは人気がなさそうな会社ですね。倍率が低くなることを期待していたわけです。

■筆記試験はうまくいったが……

書類を提出すると、続いて筆記試験（一般常識と論作文）、面接という段取りです。私の場合、筆記試験までは何とかうまくいきました。

勉強はあまりしていませんでしたが、新聞はきちんと読んでいたので一般常識対策にはなりました。一般常識は、現在の出来事について聞かれるので、新聞をきちんと読むのは基本中の基本でしょう。とにかく一紙でいいので、きちんと読む。そしてわからない言葉があったら、『知恵蔵』や『イミダス』などで調べてみる。こんなふうにやっておくと、今の出来事についてはかなりフォローできると思えます。

論作文については、もともと文章を書くことが好きだったので、これも何とか言っていました。こんなことを言っただけじゃないのかもしれないが、私は学生時代にレポートの代筆をしたりして

いて(笑)、いくら稼いでいたんですね。ただ、あまり文章を書くのは好きじゃないという人もいるわけで、そういう人はしっかり論文文対策をした方がいいでしょう。論文文対策は、とにかく文章のパターンを作るのが一番です。最初に結論を書いて、次に理由を説明して、最後にまとめを書く。たとえば「〇×についてどう考えるか」というテーマだったら、「私はこう思う」と結論を書いて、「なぜならこうだから」と理由を書いて、その理由のところをあれこれと延ばす。そして、最後のまとめで何か気の利いたことを言っておくんです。こういった文章のパターンを作っておくと役に立つと思います。

■面接官が聞きたいようなことを答える

筆記試験が終わると面接なんですけど、面接ではことごとく落とされました。今から考えると私も世間知らずだったなと思います。最初に面接に行ったのは、公務員試験向けの問題集などを出している出版社でした。面接官が三人ぐらいいいて、「君はどういう本を作りたいのか」と聞くので、私は「社会に問題提起するような本を作りたい」なんて答えたんですね。そうすると面接官は、友好的な雰囲気ではあるんですが、「ほお、そうですね」なんて言う。結局、数日後に不採用通知が届きました。

いい雰囲気だったのにダメだったか、と当時は思いましたが、今から考えるとダメな理由ははっきりしています。社会に問題提起するような本を作りたい、なんて言っている人間は、その会社では不要だったんですね。よくよく思い出してみると、面接官もちょっとせせら笑うような感じがありました。要するに、会社ごとにはしい

人材は違うわけで、どんな人材をほしがっているのか、という点を見極めないと、面接でうまく受け答えができないんです。

人間誰しも自分が聞きたいことを聞きたいわけで、それは面接官だって同じこと。だから、彼らが聞きたいような話を聞かせてやればいい。面接官をだますくらいのことをしないと、なかなか採用されません。ただ、自分とはまったく違う人間を演じざるのほちょっと無理なので、ある程度は本音を交えつつ、その会社でほしがっているような人間を演じるわけです。採用されてしまえばこっちのもの。面接のときのやりとりなんか、面接官は一年もたないうちに忘れてます。「君、あのときああいうふうに言ったじゃないか」なんて言われることはまずありませんから。会社の中で面接官に会ったら、「あのときはお世話になりました」くらい言っておけばいいんです。

面白かったというか、興味深かった体験としては、中学生向けの模擬試験などを作っていた進学テスト会社の面接があります。集団面接で、面接を受けるのは五人くらい、面接官は二、三人でした。集団面接と言ってもディスカッションはなく、面接官の質問に端から順番に答えていくという形です。びっくりしたというか、馬鹿じゃないかと思ったのは、「あなたの支持政党は何ですか」という質問があったことですね。私の数少ない面接体験の中でも、これはすごかった。こんな馬鹿なことを聞く会社には採用されても絶対に行かない、と思ったことを覚えています。もともと、採用されなかったので、この会社とはそれっきりになりましたが。

一月末に何とか一社から内定が出たところで、私は就職活動をやめました。内定が出た後も別の出版社の面接が残っていたんです

が、「一つ出たからいいや」と思ったんですね。マスターコースを出るための修士論文の準備もしくちゃいけませんでしたが、そんなこんなで、翌年の四月から、書籍編集者の仕事を始めることになったのです。

2 書籍編集者としての生活

私が勤めた会社では、最初に新入社員全体の研修が一週間あって、その後それぞれの職場に配属されることになっていました。

研修で印象に残っているのは、上司の呼び方ですね。普通の会社だと「〇×課長」のように役職名をつけて呼ぶんですが、「役職名をつけて呼ぶな」と言われました。たとえ相手が社長でも「〇×さん」と呼ぶ。こんな話を研修で聞いて、なかなか風通しのよさそうな会社じゃないか、と思った記憶があります。

もう一つ、「お茶が飲みたかったら自分で入れろ」ということも言われました。職場によっては女性がお茶を入れていましたが、私が配属された職場では、確かに自分でお茶を入れる習慣になっていました。そんなわけで私は、勤めてしばらくしたころ、自分専用の急須と湯飲み、それにお茶葉を持っていくことにしたんです。自分専用のお茶セットを持ってきている人は、ほかにも何人かいました。

さて、書籍編集の職場に配属されても、最初のうちは大した仕事をさせてもらえず、手伝いのような仕事を割り当てられました。このあたりは、今とはかなり事情が違うだろうと思います。当時は余裕と言うか、ゆとりがあったんですね。原稿整理や校正など、隣の

席の同僚が手取り足取り教えてくれました。仕事は一年間ぐらいかけて覚えさせていこう、という幸せな時代だったんだと思います。私は出版の仕事については何も知らず、まったく白紙の状態だ勤めはじめたわけですから、その意味では助かりました。

■出版社の仕事

出版の仕事というと、みなさんはすぐに編集者を思い浮かべるのかもしれませんが、編集以外にもいろいろな仕事があります。

まずは販売ですね。これは本や雑誌を売る仕事です。書店や取次を回って注文を取ってきたり、在庫を管理したりします。特に小さな出版社では、編集者でも書店回りをすることがあります。私は書店からの注文の電話は受けさせられましたが、書店回りはしたことがありません。ただ、書店回りはしておけばよかったなあ、と思っています。実際の売れ行きなどを書店の人から聞くのは、企画の参考になりますから。また、販売の仕事では、年に一回は全国の書店を回って、自社の出版物の売れ行きを聞いたり、注文を取ったりします。

広告の仕事も出版社には欠かせません。広告には、自社の媒体に広告を取ってくる仕事と、新聞など他社の媒体に広告を出す仕事の二つがあります。今は景気が悪いですから、広告を取るといっても広告代理店まかせにはしないで、直接スポンサーを回って広告を集める、ということも多いだろうと思います。

あともう一つ、製作の仕事があります。製作というのは、本や雑誌を作るときに費用を見積もったり、印刷会社や紙問屋などと値段の交渉をしたりする仕事。たとえば印刷会社が持ってきた請求書を

見て、「もうちょっと安くならないの？」なんてシベリアに交渉するわけです。

大きな出版社だと、こうした職種はそれぞれ分かれているんですが、小さな出版社だとあまり細かく分かれていません。一人ひとりの編集者がなんでもかんでもやっている、というのが実情です。

■新聞のベタ記事から最初の企画を立てる

書籍編集の職場では企画はいつ出してもいいことになっていたの、見よう見まねで企画書を書いて、入社した年の夏ごろに企画を一本提出しました。それが手元の資料に書いてある「新聞のベタ記事から最初の企画を立てる」という話です。

元にしたベタ記事は「朝日新聞」のもの。私は「朝日新聞」をきちんと読んでいなかったのですが、この記事は友人から教えてもらいました。モニカ・ブラウというスウェーデンの新聞記者が「禁じられた原爆報道」という英文の本を出版した、という記事ですね。一九四五年から一九四九年にかけて、日本の原爆報道は連合国総司令部（GHQ）によって検閲されていて、ブラウさんはこの問題について本を書いたんです。彼女は当時東京にいて、日本などをカバーする特派員をしていました。翻訳出版の契約を結ぶときに何回か会ったことがあります。『検閲1945—1949—禁じられた原爆報道』（立花誠逸訳）という形でまとめたのは、一九八八年一月です。

自分の企画でとにかく一冊作ってみると、本作りは面白いなあ、と感じました。雑誌もそうですが、出版物は形として残るんですよ。ただ、雑誌は何人かで作りますが、書籍はだいたい一人で作業

します。そういう意味で、充実感というか達成感は雑誌よりもあると思います。

その代わり、誤植も後に残ってしまいます。その本が増刷になれば直すこともできるんですが、増刷にならない限り直すことはできません。『検閲1945—1949』は増刷にならなかったのも、誤植は今でもそのまま残っています。

ちなみに言うと、本を作り終えた直後というのは絶対に読み返す気分にはなれません。どうしてならないかというと、原稿が来てまず一回通して読みますよね。『検閲1945—1949』の場合は手書き原稿でしたから、B5サイズの二〇〇字詰め原稿用紙が、小さい段ボール箱に一箱分届いて、それを最初に一回読みます。その後、ゲラ（校正刷り）になったものをだいたい三回読みます。さらにオフセット印刷の刷版を作るためのフィルム（青焼き）——ゲラのようなものです——を一回ざっくりと読む。合計で四〜五回は同じ原稿を読むわけです。内容を味わって読むのは最初だけで、あとはひたすら間違いないかどうかを確認しながら読む。そうすると、読むということに関していい加減うんざりしてくるんですね。

もっとも、自分の手を離れて本ができあがるまではちょっとワクワクしています。できあがった本を見ると、やはりうれしいんですよ。それでもバラバラと見るだけ。ところが、この何気なくバラバラ見たときに誤植がよく見つかるんですよ。「しまった。もう少しちゃんと読んでおけばよかった」と思っても、もう後の祭りというわけです。

こんなとき、編集者は単に本が好きというだけじゃダメなんだなあ、と思いました。もうちょっと違うところで「好き」を見つけたな

いと編集者としてはやっつけていけない、ということ。たとえば本を作っていくプロセスが好きというの「あり」でしようし、装幀をデザイナーと一緒に作り上げていくのが好きというの「あり」でしょう。装幀を実際に作るのにはデザイナーなんですが、「こんな仕上がりにして」といろいろ考えてデザイナーに依頼するのも楽しみの一つではありませんね。

■自分の立てた企画がポツになったとき

調子に乗ってバンバン企画を出していたんですが、当然ポツになる企画もあります。ポツになるのは基本的に会社の方針と合わないからなんです。ポツになると執筆者との関係が悪くなることもあって、これはつらかったですね。

書籍の企画会議では結構きつい意見も出ます。たとえば「この人は知名度がないから、本なんか出しても売れない」とか。知名度がなくとも内容がよければ売れる本もあるので、こうした意見は必ずしも正しくはないんですけどね。ただ、企画会議で出た意見をダイレクトに執筆者に伝えるわけにはいかないので、うまくカバーしてお詫びの手紙を書き、さらにはお詫びの電話をして、できれば一回どこかでお目にかかって「どうもすみませんでした」と頭を下げることになります。

ここで終わってもいいのですが、もう少し丁寧にやるときは、ほかの出版社を紹介することもありました。私はほかの出版社の編集者をそんなに知っていたわけではなかったんですが、それでもいくつか紹介しています。あと、「どこかの出版社に売り込むときに使ってください」と言って企画書のデータをフロッピーディスクに入

れて渡すとか、そんなフォローをしていました。とはいえ、企画が通らなかったことは事実なので、それで怒っちゃう執筆者もいます。そういう人とは疎遠になってしまいうわけです。

企画を立てていくうちに、いろいろなメディアを幅広くフォローしておくことが大切なんだな、ということを実感しました。それまで私は週刊誌をほとんど読まなかったんですが、たとえば『週刊現代』や『週刊ポスト』なども電車の中づり広告をチェックして、面白そうな記事があれば読んでみる、といったことはするようになりました。また、新聞の切り抜きも、関心のあるテーマについては思いついたときにやるようになりました。こんなふうにいるいろいろなメディアと接することで、企画の幅も広がってくるんですね。

■徹夜明けの朝日はまぶしかった

勤めはじめてから七年間、私は『時事年鑑』という事典のような本の編集スタッフに加わっていました。『時事年鑑』というのは一年間の政治、経済、社会などの出来事をまとめた本で、これを作るのに半年、残りの半年で普通の本を作る、という生活でした。

『時事年鑑』の一年間というのは変則的で、秋から夏までなんです。競合する『朝日年鑑』（朝日新聞社）とか『読売年鑑』（読売新聞社）よりも早く作って早く売ろうという話なんです。そのため一月から二月までという区切りを無視して、変則的な区切りにしていました。

毎年一〇月一日発売だったので、九月の半ばまでには編集作業が全部終わってなきやいけないというスケジュールになります。したがって、八月半ばから九月半ばまで市ヶ谷にある大日本印刷の出張

校正室に缶詰め状態になりました。出張校正室というのはゼミ室くらいの広さで、スチール製の大きな机と、事務用の堅い回転椅子が置いてあります。この部屋に編集スタッフが六人くらい詰めるんです。ゲラや各種の資料類も大量に持っていますから、部屋の中は満杯状態。夏なので冷房はガンガン効いているし、たいして動きもしないのに食事を二食とる、という生活を約一カ月間、余儀なくされました。

ゲラを読むのはかなり神経を使います。でも、字ばかり見ていると眠くなるんですよ。眠くなると寝ちゃうんですが、寝てばかりもいられないので、ウォークマンで音楽やラジオを聞きながら仕事をしていました。なかなか原稿を書かない執筆者もいるし、とにかく一カ月ぐらい、朝から晩まで出張校正室で暮らしていると、何かくらくらい気分になってきたものです。

何年目かの出張校正のときに、どうしても明日までにこれを仕上げなきゃいけないという仕事が出てきて、仕方がないので、同僚と二人で残って徹夜したことがありました。私が徹夜で仕事したのは、このときが最初で最後。普通の人が出勤するところに家に帰ったんですが、さすがに朝日が目に染みました。

ビジュアル中心の雑誌だと、徹夜は頻繁にあるようですね。大きな会社だとシャワー室があったりしますが、小さい会社だとそんなものはありません。どうしているんだろうと話を聞くと、会社の近くにある銭湯に行っているとのこと。「下着はどうしてるの?」と聞いたら「コンビニで買ってる」。これは男性の話です。

単純に仕事の量が多くて徹夜になることもあるでしょう。仕事量の割りに編集者の数が少ない、というケースですね。もう一つは編

集者の事務処理能力がちょっと低くて、段取りよく仕事ができないので徹夜になるというケース。ついでにもう一つ言うと、編集長がいい加減で、たとえば一回組んだゲラを「これはダメ、差し替え」などと言うので仕事が増える、というケースもあります。

個人的には、徹夜までして仕事をしていったい何になるんだ、と思っています。徹夜するような働き方が当たり前になると、体の弱い人は編集者になれない、なんてことになってしまいますから。もう少し段取りよく仕事をすれば、何も徹夜までしなくてもすむのでは?と私自身は思っています。

■自主規制という圧力

仕事の話としてもう一つ、自主規制の話をおきましょう。みなさんもジャーナリズム関連の講義の中で、この種の話は聞いていると思います。

もともとは私の同僚が企画した本がありました。同僚が別の部署に異動したので、私が後を引き継いだんですね。上司たちはこの企画に最初から乗り気ではなかったんですが、自社の媒体(週刊誌)で原稿を書いている執筆者だったので何とか企画会議を通過した、といういきさつがありました。新幹線や大型航空機、原発といった「巨大技術」の問題点を論じた本で、書き下ろしが半分、月刊誌などに発表した原稿が半分、という構成です。

一回目のゲラ(初校)が出たときに、書籍編集部門の部長が「そのゲラを見せろ」と言ってきました。仕方がないなと思ってゲラを渡したんですが、彼らがゲラを見た結果、三〇カ所以上の書き直しを要求してきました。

馬鹿なことを言ってるなあ、これは徹底的に反論するしかない、というのが私の率直な感想でした。彼らは本当にわけのわからないことを言うんですよ。この本に収録している既発表原稿——ある月刊誌に発表したもの——のタイトルを変更しろ、などと云ってくる。私が「すでに発表されたタイトルなんだから問題はないでしょう」と言っても、上司たちは、不適切だとか、刺激的だとか言って応じない。そのくせ自分たちで執筆者に言うのは嫌なのか、交渉はすべて私にやらせようとするわけです。

そこで私は、執筆者にこれまでの経緯を洗いざらい話しました。もちろん、部長たちの書いた文書なども全部見せています。その結果、「とにかく今回は本を出すことを最優先にしましょう」と執筆者が言ってくれたので、私も徹底的に反論するのはやめました。そして執筆者と相談して、書き直しに応じられる部分を十数カ所に絞り、最終的に刊行にこぎつけたわけです。

3 編集者を辞めて見えてきたこと

こんなふうに九年九カ月勤めて、私は会社を辞めました。九カ月ということは、冬のボーナスをもらった一二月に辞めたということ。今はフリーランスのライターとしての仕事を中心になっています。もちろん短大の非常勤講師も仕事の一つです。

■編集者に向いている人とは？

フリーランスのライターとして編集者につきあうということは、自分のやってきた仕事を外から眺めるとのこと。外から眺めてみ

ると、編集者に向いているのはどういう人なのか、といったことが何となく見えてきます。

共通しているのは、やはり情報を幅広く集める、情報を集めるのが好きということですね。特定のジャンルについては強いけれども後は知らない、という人はあまりいません。ある程度幅広く情報を集めている人が多いですね。

そして、ただ単に情報を集めるだけではなくて、自分なりに「私はこう考える」という判断ができること。情報を集めただけでは役に立ちませんから、自分なりに判断できることが大切ですよ。

さらに言うと、好き嫌いがあまり激しくない、ということも挙げられます。好き嫌いが激しいと、集める情報にどうしても偏りが出てきます。もちろん人間ですから好き嫌いはあっていいんですけども、あまり激しくない方がいいでしょう。

私自身は好き嫌いがかなり激しかったので、幅広く情報を集めるということはいくらもできませんでした。それなりに努力はしたんですけどね。その意味では、編集者向きではなかったのかな、と思っています。

あと、「できる編集者」という人たちがいて、そういう人たちを見ているといくつかの特質が浮かび上がってきます。

まず、出版社の枠内で企画がきちんと立てられるということ。企画力ですね。枠というのは、その出版社が抱え込んでいる読者層のことで、そうした読者層に向けた企画が立てられる、ということですよ。

次に、執筆者をやる気にさせるのがうまいということ。これは交渉力。やる気にさせるといえるのは、相手をおだてるのとはちょっと

違います。単におだてあげれば書く執筆者もいるんでしょうが、相手も人間ですから、「つぼ」をつかないとダメ。「殺し文句」と言ってもいいと思います。「この編集者のためなら書いてもいいな」と執筆者に思わせるようなことを言えるかどうか。このあたりがカギになりますね。

そしてもう一つ、仕事の段取りをきちんとつけてあげばきと実務をこなせること。編集者の中には、事務処理能力のない人が意外に多いんですね。外から眺めるようになって、このことは特にわかりました。

今は多くの出版社で電子メールが使えるようになっていて、原稿もメールで送ることが普通になっていきます。会社の場合はインターネットにつながるっぱなしですから、そんなにタイムラグがなくてメールを受信できます。そこで、メールを受け取ったという返事を書くか書かないか。返事を書かない人は徹底的に書かないですね。こちらはあの原稿でいいのかな、と思っているんですが、いつのまにか原稿を掲載した雑誌が送られてくる、なんてこともあります。けれども「できる編集者」は、そんなに時間を空けないで返事を書いてきます。すぐにはなくても、その日のうちに、手の空いた時間に返事を書く。「まだ原稿を読んでないんですけども、とりあえずいただきました。ありがとうございます」という返事を送ってきます。

本当に細いことなんです、こうした事務処理能力は編集者と執筆者の信頼関係につながってきます。「できる編集者」になるためには、かなり重要な条件じゃないかと思っています。

私は事務処理能力には自信があったんですが、企画力とか交渉力

はいまひとつでした。そんなわけで、「できる編集者」ではなかったなあ、と自分では思っています。

■仕事の意味を考えること

かつて編集者として仕事をしてきて、そして今はフリーランスのライターとして仕事をしてきて、ずっと気になっているのは「自分がどんな情報を送り出しているのか」ということです。編集者もライターも情報を送り出す側の仕事ですから。

ライターをやるようになって実感するのは、自主規制したくなる気持ちは自分自身の中にもある、ということ。私がライターとして書いているのはパソコン関連雑誌の原稿ですが、たとえばちょっとほかして書いておこうか、といった気持ちになることはあります。でも、そういうふうには自主規制してしまおうと、正しい情報が読者に伝わらなくなってしまう。現実には編集部意向というものもあって、なかなか思い通りには書けないわけですが、自分がどんな情報を読者に伝えたいのか、ということは常に考えていかないといけないなあ、と思っています。

こうしたことをいつも考えている必要はないと思いますし、考えなくても仕事はできるでしょう。しかし折に触れて考えるようにしないと、単に流されて仕事をしていくことになってしまいます。あまりいいことではないですよ。

■終わりに——どうしても編集者になりたい人へ

みなさんの中には、出版の仕事に就きたいと思っている人も多くいます。現実問題として、多くの出版社は学歴差別をしている

ので、短大卒という学歴で出版社に就職するのはなかなか難しいでしょう。学歴で門前払いにする理由なんてないんですけどね。

こういう現実があるので、とにかく四年制大学卒という学歴を手に入れるしかないと思います。そんな気楽に言われても……と思うかもしれませんが、大学は何も昼間部だけじゃなくて、夜間部（二部）という選択肢もありますから。二部に進学して、昼間は出版社でアルバイトをする、というのも一つのやり方ですね。もともと、

最近の二部はかなり早い時間帯から授業がはじまったりします。本来の意味での夜間部とは言えなかつたりするところが困りものではありませんが。

出版社のアルバイトにはだいたい二つのパターンがあるので、面接のときによく確かめるといいでしょう。一つは原稿の受け渡しなど単純作業をするアルバイトですね。出版社によっては、名前ではなく「バイト君」なんて呼んだりしています。ああいう呼び方はちょっとなあ、とはたで見えていて思いますね。いずれにせよこの種のアルバイトはあまり面白くないですから、やめておいた方がいいでしょう。

もう一つは、編集や販売などの補助業務をやらせてくれるアルバイト。こういうアルバイトを経験してみると、実務とはこんなものなんだなあ、というイメージが湧いてくると思います。

ただ、勘違いしないでほしいのは、出版社の仕事にはマニュアルがあるわけではないので、会社ごとにやり方が違います。まったく違うかという点、そういうわけでもないんですが、微妙に違うところがあるんですね。たとえば、一回目のゲラのことを「初校」（しょこう）と言います。私は「こう」の部分にアクセントを置いて発

音しますが、「しょ」の部分にアクセントを置いて発音する出版社もあります。言葉の発音一つ取ってもこんなふうに違いがあるので、自分の経験したことがすべてだと思わない方がいいでしょう。

まずは自分自身でしっかりと情報を集めて、その情報をもとにして自分自身の道を選び取ってください。といったところで、今日は終わりにします。どうもありがとうございます。

■質疑・応答

《ライター志望の人も編集者を目指した方がいいのか》

○柴崎 ライターが原稿を書くのは基本的に雑誌ですよね。いきなり本を書く、というふうにはなりません。講演の中でも言ったように「この人は知名度がないから、本なんか出しても売れない」なんて言われるのがオチですから。雑誌に原稿を書くときには、雑誌の編集実務を知っておいて損はないだろうと思います。編集者にとってよい原稿とは何なのか、言い換えれば編集者が喜ぶ原稿とは何なのか、ということを知っておくと、ライターとして強みになるでしょう。一般的に言えば、編集経験のあるライターは編集者から好まれます。細かいことを言わなくてもわかってくれる、つまり「手間がかからない」から。また、編集者として何年か勤めて、その間にほかの出版社の編集者と知り合いになって、いざフリーランスのライターになったときに仕事をもらう、ということもできるでしょう。

編集者（エディター）と執筆者（ライター）の仕事はまったく違います。最初からライターになるよりは、いったんエディターの仕事を経験してからなった方がいいだろうな、とは思っています。

（二〇〇一年一月一七日 現代文化学会講演より）